

論文の要旨

論文題目 言語類型の起源と系譜
氏名 近藤健二
学位 博士（学術）
授与年月日 平成 16 年 7 月 7 日

本論文において筆者が向かい合おうとしたのは、歴史の夜が明けるはるか以前から現在に至るまでの言語変化の歴史である。世界の言語は能格言語、活格言語、主格言語といった類型に分けることができるが、このような言語類型ははじめからあったものではなく、歴史的に成ったものである。そして、それらは歴史的につながっている。本論文は、それら三つの類型がどのような順序を追って、またどのような動因に惹起されて成り立ったかを明らかにするとともに、複数の言語類型を包みこんだアジア太平洋諸語が同一の祖語、あるいは祖語の祖語に遡るものであることを論証しようとしたものである。以下、論の概要を具体的に述べる。

まずはじめに、「主語についての緒論」を本論文の導入とした。この部分は旧来の学説を抜本的に刷新しようともくろんだものではなく、主語と主格とを比べ、また主語と目的語とを比較考察することによって、さらに主語と目的語が互いに転換することがありうるという事実を指摘することによって、後の議論に役立てようとしたものである。

次に、第 1 章「能格言語の起源」を置いた。これは、能格がどのようにして生まれたかという問題に狙いを定めた章である。そして、以下の 3 点が議論の屋台骨を支えている。

- (1) 古い言語では自動詞文が主流であった。
- (2) 具格副詞句を含む自動詞文がやがて他動詞文に転じた。
- (3) 具格副詞句が他動詞文主語となり、能格が発生した。

第 2 章では、ある言語において能格を使ったり使わなかったりする「分裂能格」の現象を、(1) 視点と焦点、(2) 現在の叙述と過去の叙述の非対称、(3) 人称の違い、(4) 動詞の意味の違い、という観点から考察し、「分裂能格」は当該言語が類型的变化をこうむる途上にあることの現れである、と主張した。

第 3 章では、他動詞文主語の形態が自動詞文主語のそれと基本的に同一である主格言語のいくつかを取りあげ、それらの言語における主語が一律に主格として表わされるのではないことを論じるとともに、そのような主語が能格言語における能格主語と類似する特徴を有することを指摘した。各節の主要な論点は以下のとおりである。

- (1) オーストロネシア語族の動詞述語文では、属格が二価的で曖昧な機能を果たし

ている。すなわち、属格が行為者を主語として表しているのか副詞的なものとし表しているのか不明である。

(2) オーストロネシア語族のたとえばサモア語やトンガ語に、また一切の語形変化を欠くと言われる中国語に能格の萌芽的形態が見いだされる。

(3) 日本語の具格主語は、能格言語の能格と類似した特徴を有する。

続く第4章では、活縮語の歴史的座標に関して、従来の一般的見解とははなはだしく異なる論を展開した。すなわち、ロシア・旧ソヴィエトの内容的類型学が教えるところに抗し、活格言語は能格言語に先行する言語ではなく、能格言語と主格言語のはざまにある言語であることを強調した。筆者の考えでは、活格言語の活格というのは、能格言語の能格接辞が随意的行為を表す自動詞文の主語に拡張することによって生まれた格である。

第5章は、文法における有生・無生という区別、および男性・女性・中性という区別の起源に関して、インド・ヨーロッパ語が過去にこうむった類型的变化の全貌を視圏におさめてその起源を探索しようとしたものである。ここで筆者は、有生・無生の区別が活格言語の特質であるという通説に反駁を加えたうえで、それが主格言語の特質であることを指摘した。そして、主語の形態的統一をはかろうとする駆動の中で、二つの生が三つの性へと変貌していった過去の構図を描いた。

第6章では研究のフィールドをアジア太平洋諸語に絞った。そして、研究の主題を類型から系統に移した。しかし、それまでの内容と完全に分断された事柄を扱おうとしたわけではない。第5章までは言語類型の発展を時間軸に沿って見ようとしたのだが、第6章では複数の言語類型を包みこんだアジア太平洋諸語を平面に並べ、そこからいくつかの言語を取りあげ、そしてそれらが同一の祖語、あるいは同一の祖語の祖語に遡るものであることを明らかにしようとした。したがってそこでの議論には、アジア太平洋諸語においても言語類型の変遷が過去にあったことを示そうとする意図が根底に込められている。

第7章では、アジア太平洋諸語の祖語に想定される格標識の **-ga*, **-ti*, **-ma* が日本語のさまざまな接辞の形成にあずかったことを指摘しようとした。**-ga*, **-ti*, **-ma* の反映形として取りあげたのは、(1) 副詞化接辞、(2) 連用形接辞、(3) 連体形・属格接辞、(4) 主格接辞、(5) 話題化・強意接辞、(6) 名詞化・未然形接辞、(7) 過去形・完了形・形容詞接辞、(8) 已然形接辞、(9) 終止形接辞、(10) 動詞接頭辞である。

また第8章では、系統不詳と言われるシユメール語とエラム語を取りあげ、それらがいずれもアジア太平洋諸語の一員であることを論じた。なおこの論考は、シユメール語・エラム語と中国語・朝鮮語・日本語との間の失われた鎖を発見しようとする意図をも含んでいる。

最後に、「日本語のタミル語起源」説について文章を書いた。そこで筆者は、その説が一片の妄想として捨て去るべきでないこと、そこには汲みとるべき大いなるものが存在することを強調した。